

クイーンエリザベス乗船記

岡本祥一
予科5-7
航空16-4
(航空通信)
(川口市)



まえがき

幸便を得て、豪華客船クイーンエリザベスでの船旅を楽しむことが出来た。

旅行会社の募集案内を受け早速申しこんだが、100人募集ですでに満杯。約1カ月後、キャンセル待ち解消、ツアーに参加できることになった。イギリスは格式社会である。部屋のレベルにより待遇が異なる。スイートルレベルの部屋を申しこんだ。

ローマで乗船、地中海、エーゲ海からギリシャ観光、帰途はアドリア海を通りベニスにて下船、ミラノ1泊後帰国、15泊16日の旅であった。



第1図 クルーズの行程

エーゲ海の空と海は本当に美しい、一度は見るべきであると知人から言われ続けてきた。加えて、豪華客船の代表であるクイ

ーンエリザベスでの旅行は夢のまた夢であった。子供のころからの夢、そしてわが人生最後の願いをかなえる旅であった。

クイーンエリザベス

2010年進水、90,901噸、全長293m、乗客数：20,92名、乗組員数994名。戦前の初代クイーンエリザベス号から数えて3代目の新造船である。

船室はブリタニヤ、プリンス、クイーンズの3階級に分かれており、夫々、3等、2等、1等に対応している。食堂も各等級に合わせて別々に設定され、座席は乗船時に指定される。

当初プリンスレベルの部屋を申し込んだが、偶然、クイーンズレベルに格上げされる幸運に恵まれた。

クイーンズレベルでは手厚いサービスがつく。シャンパン、ワイン、ビール、ウイスキー、ソフトドリンクは無料。パトラー（執事：部屋付き高級船員）が何かと気を配る。部屋はかなり広く、船の最後尾で見晴らしが素晴らしく、目の前を白い航跡が遠く水平線まで届くのを見ることができた。



第2図 航跡と満月

ローマの泉

乗船前、ローマに1泊。40年以上の昔になるのだろうか、国際会議出席と称して

欧米を訪ね回った。その折、同行した友人たちとローマの泉で背中越しにコインを投げ、再訪を約束した思い出が今も鮮明にのこっている。その懐かしい人たちは全て地球上から姿を消してしまった。生者必滅、年月は残酷である。一人ひとり思い出しながらコインを投げ冥福を祈った。悲しかった。



第3図 ローマの泉にて

船内生活

部屋は快適、広いベランダで、他人の目を気にすることなく寝そべることが出来る。とにかく居心地がよく、部屋の中でほとんどの用事が満たされる。ルームサービスは至れり尽くせり。船内にはいろいろなゲーム、催し物等があったが、室内で過ごす時間が多かった。

しかし、正直、暇をもてあました。見えるものは水平線だけ。カジノや高級商品が並ぶアーケードとは無縁。部屋を出るのは食事と、歩行者デッキで気晴らしをする時だけという状況であった。ただ読書には快適であった。

結局楽しみは食事だけとなる。クイーンズレベル専用の食堂は、ウェイターも多く、サービスは極めてよいものであった。ただ、定食はボリュームが多く、敬遠。しかも見

かけは良いが、味は「いまいち」というところ。大味の料理が多かった。ある日の夕食で、鴨のローストを注文した。シェフが恭しく1匹の鴨を目の前で料理し始めた。あんな大きな鳥1匹を食べるのかと、思わず「Too much」と叫んでしまった。隣席のフランス人夫婦が「I think so. It's too much」と笑いだした。それからなんとなく簡単な会話を交わすようにはなったのであるが、実際に提供されたのは胸の一部、大きな3切れであった。それでもついに食べきれなかった。食事で気づいたもう一つの点は、あまりにも「もったいない」ということである。見ていると図体の大きな白人でも提供される料理の半分も食べきれない人が多かった。残りは捨ててしまう。欧米人は「もったいない」という感覚が極めて乏しい。英語には「もったいない」を表わすのに適切な言葉が無いのである。

エーゲ海

透き通った海水を湛えるエーゲ海。陽光を反射して輝く青い海、そして点在する教会の屋根の鮮やかな紺青。エーゲ海入口に位置するサントリーニ島を含めて、全体の景観は確かに見応えがあった。



第4図 エーゲ海

サントリーニ島は大きな湾を3方から取り囲む三日月状の島である。3千5百年前の大爆発の結果外輪山が三日月状の島とし

が残ったものである。湾の中央に名残の火口丘の島があり、薄い煙が景観に一層の興を添えている。

豪華客船

今回の船旅で強い印象を受けた一つは、ヨーロッパでは豪華客船が多い、つまり船旅を好む人口がとても多いという点であった。ほとんどすべての寄港地で、7~9万トン級の客船が4~5艘は停泊していた。サレルノ港の例を第5図に示す。本船を含めて5艘が停泊していた。今回の寄港地は10ヶ所であったが、全ての港で3~4艘の大型客船が横付けされていた。それに比べ、例えば、横浜港、東京港などで豪華客船を見る機会はあまりない。我が国とは対照的な港風景であった。

最近では日本でも飛鳥を含めて大型客船によるクルーズが盛んになっているようである。アベノミックスでゆとりが増えれば、もっとクルーズが盛んになるのではないかと期待している。



第5図 イタリア、サレルノ港にて

ミラノのドゥオーモ

今回の船旅を通じて強い印象として頭に刻みこまれたことは、キリスト教文化の偉大さ、強大さである。例えば、絵画の源泉は教会に描かれた宗教画であり、音楽も祈りから発展したと聞いている。

ベニスで船旅を終え、ミラノに夕方到着

した。ミラノのドゥオーモ（大聖堂）に一目散に駆けつけた。

約40年の昔、ローマからベルンに向かう途中、ミラノ駅に到着、有名なドゥオーモ見学になけなしのお金をはたいてタクシーで駆けつけた。入口についたとたん、夕方5時のドゥオーモの鐘が鳴り響いた。目の前でおおきなドアが閉まり始めた。その無念な思いが頭にこびりついている。

今回は、入口に夕方4時に到着、入場した。大昔の恨みをやっと果たすことが出来た。巨大な石柱の列（第6図）に目を見張った。言葉を失うとはこのことか。とにかく太く高い石柱が林立して大きな建物を支えている。

次に驚いたのはこれも桁外れに大きなパイプオルガンである。どんな音が出るのか。小生の住む川口市の会館ホールにあるパイプオルガンとは全く比べ物にならない。巨大な石柱、そして巨大なパイプオルガン、キリスト教により支えられている文化を肌で知ることが出来た今回の船旅であった。



第6図 巨大な石柱

あとがき

ロードス島、アテネ、ドブロクニク等世界遺産登録地も歴訪した。これらの地は世界史、西洋史の世界である。残念ながら知識に乏しく、印象は希薄である。

次の船旅はどこにしようか。元気に動けるうちにできるだけ楽しみたいと思ってい

る。同期生諸君、ご一緒しませんか。